

# 興味深い 北陸のきのこ

富山県中央植物園  
橋屋 誠



モミタケ (photo by FUKIHARU)

京都から北陸富山に来て5年が経ちました。

初めて富山に来た頃、地元出身の職員の方から「オトコマツタケを知っているか?」と聞かれて、一瞬どんなきのこなのか見当もつかなかつたことがあります。聞けばこのきのこは、しっかりとした肉質で歯ごたえもあり、とても美味しいのだそうです。オトコマツタケとは漢字で書くと「男松茸」と書くのでしょうか、とても雄々しい?名前を持ったきのこですが、図鑑で組合わせしてみるとどうやらモミタケのようです。富山に来る前に福井きのこの会の笠原さんから「北陸ではモミタケがアカマツ林に出る」と聞いたことがあります。その時は「まさか?」と思っていたところ、富山に来た次の年、きのこ狩りの講師をして秋の松山を歩いていた時に、松葉を持ち上げて生える大きなきのこを見つけました。「すわ、マツタケ!」と駆け寄ったところ、松葉の下から顔を出したのは白い傘をしてずっしりと重いモミタケの幼菌でした。

このモミタケは、北陸では珍しくはないためか、また食用きのこととして優秀だからか、金沢の台所と例えられる近江町市場でも、秋になると他のきのこと並んで「能登白松茸」と称した地元産のモミタケが販売されています。

このアカマツ林に出る北陸産のモミタケは、他の地域でモミ属の樹下に出るモミタケと同種なのでしょうか? 私が採集した個体は、そのほとんどを食べてしまった上に、未熟で胞子が出来ていませんでした。また毎秋、食毒の判定で植物園に持ち込まれるモミタケは、私が「美味しい食用きのこです」と言った途端に、「これはラッキー」とばかり採集者がしまってしまうので、「標本にください」とは頼みにくい雰囲気 있습니다。こういう時は心を鬼にして、「いやあ、このきのこには毒があるって…」とでも言えばいいのでしょうか、心やさしい私?

にはとてもこんなことは言えません。しかし、北陸産モミタケは本当に *Catathelasma ventricosum* (Peck) Singer ののか？ 今後はしっかりした標本を作り、他地域産のモミタケと比較検討する必要性があると思います。

付け加えれば、北陸地域にもモミは生育しますが、そう多い樹種ではありません。富山県でまとまって見られるモミ林はいずれも社寺林で、その多くは人為的に植えたものと考えられています。私も何度かモミ林に行ったことがあります、調査回数が少ないためか、これまでにモミタケを見つけたことはありません。北陸のモミ林ではモミタケが生えないのか？ これも私の課題の一つです。

最近はきのこのフロラにも興味が出てきました。自分のテーマであるチチタケ属菌のフロラは勿論ですが、現在自分が見ているきのこ（個体）が、どの地域で見られるものと同種なのか、国内だけでなく世界的なフロラが気になってきます。同じ種類が海を隔てて隔離分布していたり、連続的に広い分布を示したりなど、世界の高等植物の世界では既知の事柄でも、きのこに当てはめると面白いことがたくさんあると思います。この謎を調べるためにには、各地の博物館等の間で標本や情報の交換を行い、現時点での持てる力を有機的に結合させることが一番でしょう。

しかし、ひっくり返せばフロラの仕事は、きつちりと同定された数多くの標本の積み上げがあって初めて完成するものです。ですからこの仕事は限られた研究者だけができるものではなく、広くアマチュアの協力が必要で、この協力があって初めて日本のきのこの像の解明に繋がるのだと思います。

なお蛇足ですが、富山県で「白松茸ではないか？」として植物園に持って来られるきのこの多くはテングタケ科のシロテンゲタケであり、

石川県でこの近縁のドクシロテンゲタケ（仮称）によっての死亡例があげられています（池田（1996） 石川県のきのこ図鑑）。秋田県のきのこを書いた本にはシロテンゲタケを「シロスマツタケ」と称して食べていることが書かれています（畠山（1993） きのこ・山野草）が、この仲間の試食は慎しんだ方が無難でしょう。



シロテンゲタケ(photo by FUKIHARU)

### 橋屋 誠：

本郷教授が現役であらせられた頃、橋屋さんはそのときの本郷研究室の現役の学生だった（指導教官は横山和正先生）。卒業後、中学校の先生を経て、きのこのへの思い断ちがたく再度母校の大学院できのこを学ぶ。現在は富山県中央植物園勤務、チチタケ属と富山県のきのこフロラに興味をもっておられるということです（編集注）。